

栃木県・那須町共同利用模範牧場調査記録

8月17日（木）

調査チーム：千葉委員、原田委員、三好氏（事務局）

調査内容：

調査場所：那須町共同利用模範牧場

協力者：那須町役場農林振興課 町田主任

株式会社那須の農（みのり） 那須町共同利用模範牧場 白田牧場長、岡田氏

1 牧場の概要

① 「那須町共同利用模範牧場」は、昭和43年に設立。農林水産省の「共同利用模範牧場建設事業」を利用してつくられた「公共牧場」である。当時、農林水産省畜産局の政策として、畜産農家個々に飼料基盤を持つことが困難な我が国では、育成牛を農家から預託して共同で育成する牧場を各地に作ることを奨励していた。本牧場も、本州有数の酪農地帯を形成するに当たり必要な施設として建設された。

② 那須町営の共同牧場として放牧可能な期間は放牧し、冬期間は農家へ戻す、という手法を基本としつつ、公共牧場の機能強化の一環として、冬期間の牛舎内での飼育や種付け実施している。

牧場面積は376ha。うち集約草地（牧草地）245ha、自然草地（野草地）131ha
所有者区分では、町有地333ha、民有地47haとなっている。

放牧頭数は500頭以内とされている。

③ なお、平成27年度から「農地所有適格法人 株式会社那須の農（みのり）」が指定管理者として「公共牧場受託事業」を実施している。

「那須の農」は平成11年に「那須TMRセンター」として設立され、平成19年に現在の法人になっている。現在でもTMR生産（飼料生産）、コントラクター（作業請負）を主な事業しており、稲発酵粗飼料（稲WCS）生産も行っている。

2 調査の概要

① 「シェフ牛」事業においては、育成段階から肥育段階へ移ったあと、放牧を主体とした自給飼料による肥育を行うこととしており、この放牧肥育場所の確保が重要である。今回の調査は、栃木県で確保している子牛（ブラウンスイス5頭、ジャージー3頭）を肥育するためのフィービリティ調査として、栃木県畜産振興課から紹介していただいた「那須町共同利用模範牧場」を訪問したものである。

② 当方として、望ましい肥育牧場の要件は、

ア 春～秋期間で、放牧可能な期間は、放牧肥育されること。

イ 放牧不可能な冬期間は、畜舎内で飼育可能で、給与する飼料の7割程度は自給飼料であること

ウ 自給飼料以外の配合飼料は、乾物で3割以下であること

等である。今回、事前に把握した情報による限り、県の推薦もあるが、那須町共同利

用模範牧場は望ましい要件を備えていると思われる。

③ このため、当方から、「シェフ牛」事業の説明を行うとともに、肥育牛預託牧場として、「那須町共同利用模範牧場」を利用したい旨お願いしたところ、先方から提示された受け入れ条件は、以下の通り。

ア 「シェフ牛の受け入れ」には共同利用模範牧場の指定管理者である「那須の農」の株主の理解が必要。従って、本日は、受け入れの可否を返答できない。

(注：株主は38名。うち32名が那須TMR利用の畜産農家)、ほかは協力的会社)

イ アを前提として、町としては、「共同利用模範牧場」が国の補助事業を受けて「乳牛の育成牧場」として設置されている経緯から、今回、肉用牛として預託するにあたり、当該牛の所有者である「一般社団法人全日本・食学会」から町に対し「補助目的外使用申請書」を提出してもらう必要がある。その手続きをしてもらえれば、補助事業上は受け入れ可能である旨、県の担当の理解を得ている。

ウ 牧場管理の立場から言えば、他の利用者と同様の許可条件を受け入れてもらい必要がある。例えば、家畜伝染病の検査、利用者互助会の加入（事故等があった場合の保障等に利用）、その他である。

エ なお、牧場としての優先順位は、従来からの預託農家であり、そちらの希望でキャパがなくなる場合、あるいはなくなることが見込まれる場合は、「シェフ牛」の受け入れは困難。

オ 受け入れ可能となった場合、他の預託牛と同様の管理となる。放牧期間中は、放牧のほか若干の配合飼料の給与、畜舎内で飼育している場合は、牧場で生産された牧草のほか、地元で生産した稲WC Sの給与、若干の配合飼料の給与。これらは、他の預託牛群と異なった管理を行うことが困難なため、特別扱いをしないという趣旨である。

④ 先方が提示された条件は、特に問題がないので、前向きな検討を再度お願いして、返答を待つことになったところ。

なお、先方が附言した情報として、

ア 最近、酪農家の育成牛預託ニーズが高まっており（北海道産の初任牛の高騰等から地域内で乳牛を育成したいという酪農家が増加）、そちらを優先すること。

イ 現在、岩手県岩泉町から日本短角種の預託を受け入れる話が進んでいる（注：頭数は不明）。そちらが先行しているので、優先。

⑤ 一般的には、公共牧場での預託頭数は、酪農家の減少、酪農家における和牛ETの利用増加（ホルスタインを借り腹に和牛生産）、交雑種生産のための和牛精液交配率の上昇等により乳雌子牛生産頭数が減少していることから、低迷または減少している。また、那須町共同利用模範牧場は300㌔を越える面積を有していること、ここに預託する「シェフ牛」は8頭であり、かつ栃木県産牛であることから、協力を得られるものと思われるが、地元の同意が大前提であるので、返答を待つこととしたい。

(写真1)

共同利用模範牧場の事務所がある区画からみた牧草地。左側の牧区にホルスタインが放牧されている。



(写真2)

(写真1)の牧草地で放牧されているホルスタイン育成牛。

